

長野県

民俗の会通信

第305号

○日本民俗学会第七六回年會に参加して……………安室 知
○それぞれの空間意識を読み解く―続「生業を支えた力」―……………三石 稔
○靈犬と竜蛇に思いを馳せて(一)―第二四二回例会参加記―……………卷山 圭一

日本民俗学会第七六回年會に参加して

―民俗地図研究会によるグループ発表の記録―

安室 知

日本民俗学会の第七六回年會は、二〇二四年一月二六・二七日に國學院大學(東京)で開催された。今回の年會で特筆すべきは、長野県民俗の會の中に組織された民俗地図研究会の有志五名が民俗地図をテーマにグループ発表をおこなったことである。

七六回年會は東京での開催ということもあり、参加人数は例年になく多かった。発表件数だけ見ても、個別発表が九二件、グループ発表が四件あった。そのうちの一件が長野県民俗の會によるものということになる。グループ発表には一件あたり二時間が割り当てられたが、五名で割り振ると一発表あたり質疑応答の時間を入れて二〇分ほどにまとめなくてはならなかった。そのため、全体構成や個別の発表内容に関しては事前に十分な打ち合わせをおこなって本番に備えた。さらに会場では発表に用いる民俗地図を補助資料として聴衆に配ることとした。補助資料に掲載する民俗地図はグループ全体で統一感を出すため、既定の形式で作成することとした。結果的に

補助資料は、三二点の民俗地図が掲載され、表紙を含むとA四判一八頁に及ぶ大部なものとなった。

筆者の予想では、一日の間におこなわれる発表の数が多く、また同時並行的に一二会場で発表が進行することから、本グループ発表の聴衆は多くて三〇人程度と想定した。したがって、補助資料も三〇部しか用意しなかった。しかし、メンバーの一人が機転を利かせ当日さらに四〇部を用意してきてくれた。結果的に合計七〇部の補助資料はすべてなくなり、遅れて会場にきた人のなかには補助資料を手にする人が何人もいた。その意味で、今年会の研究発表において、民俗地図はひとときわ高い関心と呼んだといつてよい。

グループ発表の全体タイトルは「民俗地図の理論と実践―長野県史民俗編資料とGISの活用―」とした。発表は、代表者である福澤昭司氏による趣旨説明の後、五名が各自タイ

トルを設定しておこなった。グループ発表の全体構成としては、まず第一発表において、学史を含め理論的枠組みについて提起をおこない、第二発表以降は長野県史民俗編資料を用いて具体的に民俗地図研究を実践するものとなっている。各発表のタイトルとその概要は以下の通りである。

第一発表「方法としての民俗地図」(安室知)。安室は、柳田国男以降の学史を踏まえ民俗地図とは何か定義した上で、民俗学方法論としての意義を論じた。とくに日本に存在する膨大な数の民俗誌データを用いた中縮尺の民俗地図の重要性を説き、それについて長野県史資料を用いて実践例(仮説)を示した。第二発表「盆の供え物のウマ・ウシ分布から地域性を考える」(白井ひろみ)。白井氏は、盆棚に供えるなすやきゅうりのウマ・ウシについて、その対象家畜と使用される野菜の分布から、一定の地域性を見いだし、その要因分析のために馬牛の飼育頭数など『長野県町村誌』を用いて作成した地図との照合を試みた。

第三発表「大正から昭和初期における長野県の豊蚕祈願について」(小原稔)。小原氏は豊蚕祈願が年中行事の中でもとくに物作りお